京都新聞（夕刊）　1995年（平成7年）8月24日　木曜日

京都楽壇 戦後50年の点描 20

カザルス来日

語り継がれる京響との名演

「あの演奏会はすごかった」。いつまでも語り継がれる演奏がある。昭和三十六年四月二十日、当時八十四歳だったパブロ・カザルスが京響を指揮したドボルザークのチェロ協奏曲（独奏・平井丈一朗）は、まず最初に指を折って数えられるものの一つだろう。

チェリスト・カザルスの名前は、戦前からバッハの「無伴奏組曲」やコルトー（ピアノ）、ティボー（バイオリン）と組んだベートーベンの「大公トリオ」などのSPレコードで高名だった。

昭和十一年（一九三六年）スペイン内乱が起きた。ナチス・ドイツと国を組んだフランコ将軍が、三年後に政権を樹立した。リベラリストのカザルスはこれに抗議し「フランコ政権を認めた国では演奏を行わない」と声明。十年間、野外のためにだけ演奏活動をした。カザルスを日本に一という話は何度もあった。だが日本はスペイン承認しており、来日は実現しなかった。

そして戦後。平井がカザルスに師事、五年間、プエルトリコのカザルス邸に通い三年に学んだ。愛弟子の日本デビューのためにカザルスは来日を承諾した。チェロは弾かないが、平井の強く協奏曲の演奏指揮をするという条件。「デビュー・コンサートは東京と京都で実現した」。

演奏会の前日、午前十時から、練習が行われた。

「タータタッター、タータタッター、タタッタタッタタタタタッ…」。わずか四小節のフレーズを、カザルスは、何度も何度も繰り返して改良、理想の演奏ができるまで徹底的にリハーサルした。「二時間かかっても八小節も演奏できなかった」とフルート奏者だった川瀬基光。トロンボーンの青上演奏は、この曲の譜に入団したばかり。「何もかも新しい体験で、驚嘆だった」。

二楽章にトロンボーン三本のコラールがあり、指揮と何度も手直しして練習に臨んだ。「ストップもかからず胸をなでおろした」という。

練習は十五分の休みを挟み一回とっただけ、午後1時すぎまで続いた。指揮台の真下でバイオリンを弾いていた西村順吉は「京響は創生して五年目、熱心に演奏したがまだまだ未熟。カザルスの高度な要求を十分に理解し、演奏する力量はなかったと振り返る。「カザルスの音楽に対する厳しい姿勢は、いまでも記憶に残っている」。

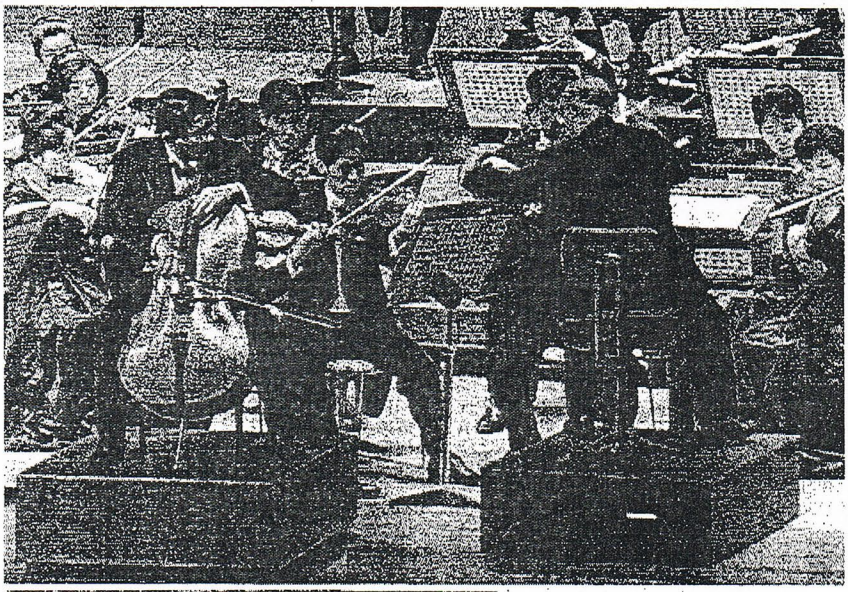
通訳も務めたソリストの平井は「練習しているうちにリズムも音色も見違えるほど変わっていった。技術は人の心を、ここまで高め上げられるものかと思った」と語ります。

演奏会は指揮を終生のチェリストが指揮。カザルスは後半、ドボルザークを一曲だけ指揮した。演奏会はもちろん大成功。京都大会終演だった喜びは絶頂に。「曲が終わって聴衆は総立ちになった。こんな激しい拍手の嵐は私はいままできいたことがない。カザルスは不自由な足を何度も舞台に運んだ。彼は演奏のようにじっと聴衆を見つめ、何度も礼をした」と報告。「カザルスへの指揮は、二十世紀の音楽史を芸術家に対しての人々の尊敬と感謝だった」と記しています。

昭三十七年、同じスペインからチェリストのガスパール・カサドが来演。同じドボルザークを演奏と共演した。恒恵子夫人とのデュオや公開レッスンも行い、市民に感銘を与えた。カサドはこの四年後にしくなったが、愛用していたチェロ（ピエトロ・ガルネリ）は遺言により京響に譲られた。チェロ自身に銘字されず、現在は柳田耕治が使っている。「張力はないけれど、繊細で品ある音がする。よい楽器ほど演奏者の実力が正直にでるので、いかげんに弾けない」と語ます。

このほか演奏は、ピアノのルドルフ・ゼルキン、バイオリンのグリュミオー、作曲家のハチャトゥリアン、ヒバイオリンのコーガン…などの数々の名演と共演。その中には、今も記憶に残る演奏も多い。

（依田）



▲愛弟子・平井丈一朗のために指揮をするカザルス（昭和36年4月20日）

◀京都駅で歓迎を受けるカザルス夫妻